

中村 隼人 (IMADRジュネーブ事務所アシスタント/キール大学助手)



今年北京で行なわれた世界女性会議からちょうど10年の節目の年に当たる。今や、ジェンダーの問題が主流化しているといわれ、男性である自分も、おそらく布団の埃を叩き落とすかのごとく叩きの洗礼に合うのではという恐れを抱きつつも、このポスト北京会議の時期に高等教育を受けてきた。

この10年、民族的な差別やそのほかのアイデンティティとジェンダーとの、重層的な影響を受けてきたマイノリティ女性たちが様々な形で声を上げてきた。ところが、この節目のときに、3年に1度だけ開かれる世界女性学大会がソウルに来るという段になって、マイノリティ女性の草の根当事者を世界のヒノキ舞台上に挙げていくサポーターとなる運動家、研究者が誰もいないという現状が顕わになった。最初は自分の教養の一部としてジェンダー論を学び、IMADRの活動に加わってからはいつの間にか複合差別関係のプロジェクトに誘いを受け、ジェンダー法に関しさらなる専門的な教育を受け、今は一部教える立場になっても、自分が目にできたのは、なかなか人種主義やそのほかの構造的な問題を見ることのできないエゴ丸出しのフェミニストたちだけであった。そんな中、IMADRの複合差別のメーリングリストの何人かの当事者メンバーから、ソウルにおいて声を上げ、様々な運動とのネットワークを築いていくという構想が上がった。そこで、今回のソウル世界女性学大会では、IMADRの活動の一部として、マジョリティ男性の自分がコーディネータとして「マイノリティ女性のための空間」を設けるべく、ワークショップ「マイノリティ女性に対する構造

的差別：国内的、地域的、地球規模の周知に向けて」を実施した。また、これとは別に、マイノリティ女性の実態調査に関して参加しているアプロ女性実態調査プロジェクト（詳細は『IMADR-JC通信』136号）が独自に在日コリアン女性が置かれている立場に関して考えるワークショップを開催したのに加え、これまで芸術の面でマイノリティ女性の表現を考えてきたミリネがアイヌの女の会と共同で、在日コリアンとアイヌの家族写真展、及びアーティスト・トークセッションを実施し、自分もこれらを陰ながらサポートさせて頂いた。なお、IMADRのワークショップにはこれらの団体に加えて、東京で在日コリアン女性を対象にした相談電話を行っているホットライン・チャメからも参加があった。

### 伝統社会と家父長制 ● ● ●

3つのセッションのすべてにおいて問題とされたのが、マイノリティ女性が直面する伝統社会と家父長制の問題である。アプロ女性実態調査プロジェクトのワークショップでは、実態調査がより一層マイノリティ社会は家父長制が存在するといった固定観念を植え付けることにならないのかといった疑問も呈される一方、人種差別のためにジェンダー差別を知ることの出来ない女性の実態を明らかにして、複合差別においては人種差別が解消されない限り女性の解放がありえないものであることしっかり読み取ることを求める声も出された。ミリネとアイヌの女の会によるアーティスト・トークセッションでは、外部社会から受けるマイノ

リティ社会における家父長制、固定観念を克服していくものとして、外部社会の対応を待たずに、自分たちで積極的に表現していく、挑戦的な芸術運動が提案された。特に、アイヌの女の会から参加したヒロ・トレシー（川上裕子）さんは、アイヌ女性の経験として、日ごろから受けた身体的特徴による偏見によってアイヌの文化を受け継ぐことが苦痛そのものであったことを、逆にアイヌであることから逃げられない現実を受けて、積極的な活動に自らを変えていけるようになったライフストーリーを涙ながらに語ってくださった。

IMADRがコーディネートしたマイノリティ女性運動当事者間の、いわば「交流」セッションにおいては、会場から、ヒンズー社会が支配的なインドにおいてキリスト教徒として暮らし、結婚差別を経験した女性から、マイノリティの女性が受ける家父長制的な抑圧、さらに、それに対してマイノリティ女性が声を上げづらい現実に関して、それをマイノリティ社会の家父長制を理由とするのではなく、マイノリティ女性を取り巻くマジョリティの社会の問題としていくことが、今後の戦略だというコメントがあった。自らの韓国名・日本名・混合名を巡る在日コリアン女性が置かれる状況、および収集したライフストーリーから、在日コリアン女性のアクティヴィズムに関する考察に関して発表を行った、李陽子<sup>イヤンジャ</sup>さん（アプロ女性実態調査プロジェクト/奈良女子大学大学院）は、これに強く賛同し、外からのステレオタイプが、マイノリティ女性が語ることを恥ずかしいものとしている現実を指摘している。アプロ女性実態プロ



ジェクトの発表において、3人の発表者が女性学の学会であるにもかかわらず、女性学と称して人種差別に関して全面に打ち出す論評をしたことは、女性学が単に女性対男性という性の対立構造を基調とした議論に収まるのではなく、家父長制に影響を与える外部社会における様々な重層的な差別に取り組む学問であることを明確に突きつけたものといえよう。

## 様々な発現と連帯 ●●●

「マイノリティ女性」と一言で言っても、そのような一つの民族があるわけではない。今回の活動を見ても、ソウルでの女性学会ということもあり、IMADRのメーリングリストの中では在日コリアンの活動家が多く手を挙げてくださった。だが、「在日コリアン女性」でさえも一つでくくれるのではない。朝鮮籍の人もいれば、韓国籍の人も、さらには日本国籍を取得した女性もいる。当初はハンゲルが出来なければコリアンとして恥だと見ていた人から、全くハンゲルが出来ず、今回の参加者署名に初めてハンゲルで自分の名前を書けた喜びを味わう人もいた。今回、参加したいいわゆる在日コリアンの団体は3団体あり、性格も姿勢も三者三様であった。民族的にはマイノリティとして連帯することも出来ない、「部外者」のオーガナイザーとして、それぞれの違いを素直に理解し、受け入れつつお互いの共通点を引き出して、交流できる場を設けたこと、そしてそれぞれが狙っている発現のありかたをソウルの場でできるようにサポートしたことは、今後のIMADRの役割として大いに活かしていかなければならない。

同様のことは、すでにマイノリティ女性団体の中でも経験されている。アプロ女性実態調査プロジェクトそれ自体が様々な「在日」コリアンがいる中で、どのように目標に向かって前へ進んでいくかという困難を乗り越えてきた人たちの集合体であり、ホットライン・チャメは相談電話を展開していく中で、ニューカマー、特に中国の朝鮮族といった「在日」コリアン女性が抱える新たな問題に対応する必要に迫られている。一方で、ミリネとアイヌの女の会がソウルでの共同制作を実現させたが、北海道開拓における朝鮮人の移民によりアイヌの親戚に相当多くの在日コリアンがいるということが、今回ソウルでの両団体の「合宿」で明らかになった。ヒロさんは早速、市場で購入した韓国の布製品にアイヌの刺繍を施すといった、意外な、しかし歴史的な重みのある作品を次々と生み出していった。違いを認めて進んでいくことで、新たな連帯も生まれる好例を史実が支持したものといえよう。

こうした「違い」は、今後の活動を考える上での教訓につながる。これまでIMADRは積極的に実態調査のプロセスを支援してきた。現在その分析が進んでおり、まもなく実態調査の内容が発表されることになる。但し、複合差別に関する活動は実態調査だけにとどまるのではなく、これからさらなる展開をしていく必要があることが、ソウルで共有されたのである。アプロ女性実態調査プロジェクトの李栄汝イヨンニョさんは調査をして女性の実態を明らかにするだけでなく、あくまでも800数票の標本という現実を受け止めて、日本政府が何らかの行動を起こすよ

う求める運動を展開していくことを提案している。一方でミリネは、芸術活動といった別のマイノリティ女性の問題の発現を提案している。これまでは家族写真という見える現実・見えない現実を作っていくことを主眼においていたものの、今後は現在の政治状況ではありえない姿を挑発する作品、例えばチマチョゴリで日本の選挙に行く家族を撮影した作品を創っていきたいという。アイヌの女の会の島崎直美さんは一方で、世界にアイヌ文化をもっと知ってもらうことが、文化を保持してきたアイヌ女性に勇気を与えると、筆者に大量のアイヌ文化に関する英語文献を贈呈してくださった。ソウルの世界女性学大会は、終わってみると、もちろん女性学の正統派に穴を開けただけでなく、IMADR、および活動家たちの将来への活動に向けての歩みを問うものであったということ強調しておく。

複合差別にそれぞれのアクティヴィズムがあることは、IMADRのワークショップが行われた翌日にはっきりした形になって私たちに突きつけられた。戦時中にいわゆる従軍「慰安婦」とされたハルモニ（おばあさん）たちが、毎週欠かさず行っている日本大使館前の水曜日デモが世界女性学大会の参加者を加えて行われた。ハルモニたちのアクティヴィズムが実を結ぶことを祈りつつ、連帯を誓いつつ、今回のソウルにおける活動がさらなる複合差別問題に対する取り組みを考えていく起爆剤になることを期待したい。

(なかむら はやと)